

令和3年度（第65回）
岩手県教育研究発表会発表資料

幼児教育分科会

保小接続期におけるカリキュラムの編成

「交流活動による相互理解をカリキュラム編成へ活かすボトムアップの試み」



令和4年2月14日

岩手県社会福祉協議会・保育協議会

奥州市立幼保連携型認定こども園稲瀬わかば園

有住百香里

はじめに

戦後の幼稚園と保育所は、文部省と厚生省の二元化行政の下、幼稚園は、学校として機能重視の方向へ、保育所は、保育に欠ける乳児または幼児を保育する施設へと固定化していった。

幼稚園教育要領及び保育所保育指針の改訂においては、平成元年以降、文部省が教育要領を改訂した翌年に厚生省が保育指針を改訂するという方法で別々に行ってきた。

しかし、平成 18 年に「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」、いわゆる「認定こども園法」が制定されると、幼稚園と保育所を一体化した運用が求められるようになった。

平成 20 年の幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂においては、文部科学省と厚生労働省が初めて部分的に共通化した内容を記載する方針がとられた。

そして、平成 24 年 8 月に「子ども・子育て支援法」制定されると、平成 26 年には、内閣府、文科省、厚労省より「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が告示された。

その翌年の平成 27 年に「子ども・子育て支援新制度」がスタートし、平成 29 年 3 月には、内容が概ね共通化された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が同時告示された。このことにより、幼児は、どの施設に通っても幼児期の教育を受けられる仕組みがつけられた。

I 主題設定の理由

1 今日の背景から

保育指針改訂（2017）の大きな特色は、保育所が「教育機関」として位置付けられたことである。保育指針第 1 章総則の第 4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」において、幼稚園教育要領等と同様に「育みたい資質・能力（3 つの柱）」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 項目）」が示された。このことは、保育所においても、質の高い教育の提供が求められていることを示している。

「10 の姿」においては、保育者と小学校教員が 5 歳児修了時の姿を共有し、幼児教育と小学校教育との接続の一層の強化を図っていくことが期待されている。小学校との連携については、保育指針第 2 章保育の内容、第 4「保育の実施に関して留意すべき事項」において次の 3 つの事項が上げられている。

ア 保育所保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮して、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること

イ 保育所保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、円滑な接続を図るよう努めること

ウ 子どもに関する情報共有に関して、就学に際し、市町村の支援の下に、子どもの育ちを支えるための資料が保育所から小学校に送付されるようにすること である。

また、幼稚園教育要領第 1 章第 6 幼稚園運営上の留意事項の 3 には、『幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のため、幼稚園の幼児と小学校の児童との交流の機会を積極的に設けるようにする』ことが示されている。円滑な接続は、幼児教育においても必要性が高く「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や小学校の学びを念頭におきながら、

幼児のバランスのとれた発達を目指し、教育目標の達成のために必要なねらいや内容を組み立てなければならない。

小学校学習指導要領第1章総則第2「教育課程の編成」の「学校段階間の接続」においては、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること～(略)』と円滑な接続を求めている。このことは、スタートカリキュラムの編成や、幼児期の教育を踏まえた学びに向かう教育活動の必要性を示している。これらの背景より、保小連携・交流の推進と接続期カリキュラムの編成が今日的課題であると考える。

2 玉里保育所の実態から

玉里保育所は、園児数29名(2019)の小規模園で、全園児が家族的で仲が良い。園児の殆どが、隣接する玉里小学校へ進学するため児童とも親しい。地域からもとても愛されている保育所である。

保小連携においては、長年「幼児と児童の意図的・組織的な交流活動」及び「教職員間の交流事業」を重ねてきている。現在は、その中心活動に「さつま芋栽培」を据え、地域の協力を得て推進している。恵まれた地域環境を活かし、今後も保小連携を積極的に推進し、双方のカリキュラムの一貫性や、系統性を認識し、相互理解を深めていくことが課題であると考える。

3 玉里保育所保育目標から

玉里保育所では、「明るく元気な子ども」「思いやりのある子ども」「協力し合う子ども」「自分で考え行動できる子ども」を目標に掲げ、その実現のため実態に即応したカリキュラムを編成し、実践、評価、改善に努めるカリキュラム・マネジメントを推進している。

2019年6月に、市教育委員会より「接続期カリキュラム」が提示され、地域の園児、児童等の実態に即応した接続期カリキュラムの編成が求められた。自治体から提示された教育課程を基本としながらも、子ども同士の交流活動等において、保小職員間でPDCAを良循環させることで、エビデンスに裏打ちされた教育課程編成が実現できると考える。このことから、小学校と連携したカリキュラム・マネジメントが必要であると考える。

以上のことから、PDCAサイクルを良循環させ、子どもの実態に即してつくりあげていく、ボトムアップによる接続期カリキュラムの編成の在り方について追究したいと考え、本主題を設定した。

II 研究の目的

保小連携・交流を推進し、相互理解を深めながら、子どもの発達と学びの連続性を踏まえた「玉里保小接続期カリキュラム編成」の在り方を探る。

Ⅲ 研究の内容

1 文献研究

- (1) 「育みたい資質・能力（3つの柱）」
- (2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10項目）」
- (3) 接続期カリキュラムとは
- (4) カリキュラム・マネジメントとは
- (5) 主体的・対話的で深い学びについて
- (6) 園児・児童の交流活動について
- (7) 評価について

Ⅳ 研究の方法

1 対象

奥州市立玉里保育所 3・4・5歳児 20名

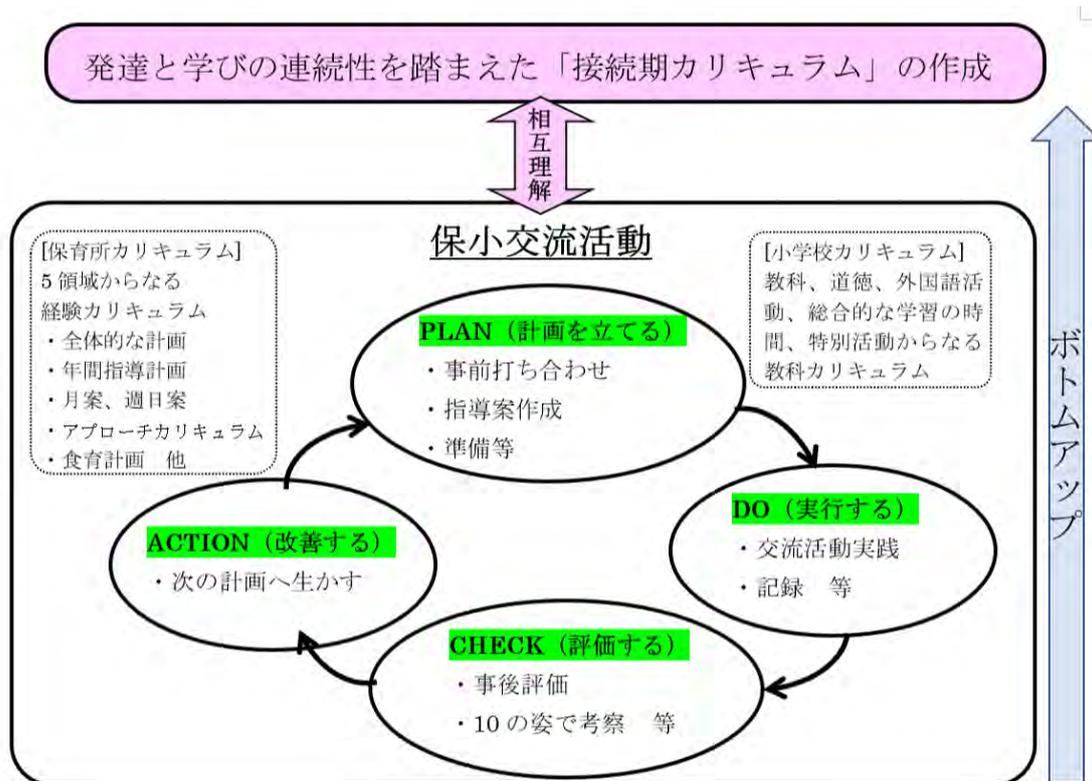
奥州市立玉里小学校 1・2・3年生 18名

保小職員 11名（所長、副所長、保育士、栄養士、校長、副校長、教員、用務員等）

2 保小職員間の交流及び幼児・児童の交流

- (1) PDCA サイクルを良循環させた組織的・計画的な交流活動及び相互理解の推進
- (2) 子どもの発達と学びの連続性を踏まえた「玉里保小接続期カリキュラム」の編成

【図 1】



V 研究の実践

1 文献研究

(1) 「育みたい資質・能力（3つの柱）」

保育所保育指針等の改訂（2017）において新時代を生きる子どもたちに育みたい資質・能力として「3つ柱」が整理された。これらは、幼児教育以降の小、中、高の学習指導要領にも引き継がれている。幼児期の教育において、この資質・能力は、5領域のねらいと内容を踏まえ、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、一体的に育ていくことが重要である。

「育みたい資質・能力（3つの柱）」*下線部は幼児教育のみ

ア 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする

「知識及び技能の基礎」

イ 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」

ウ 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

「学びに向かう力、人間性等」

(2) 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10項目）」

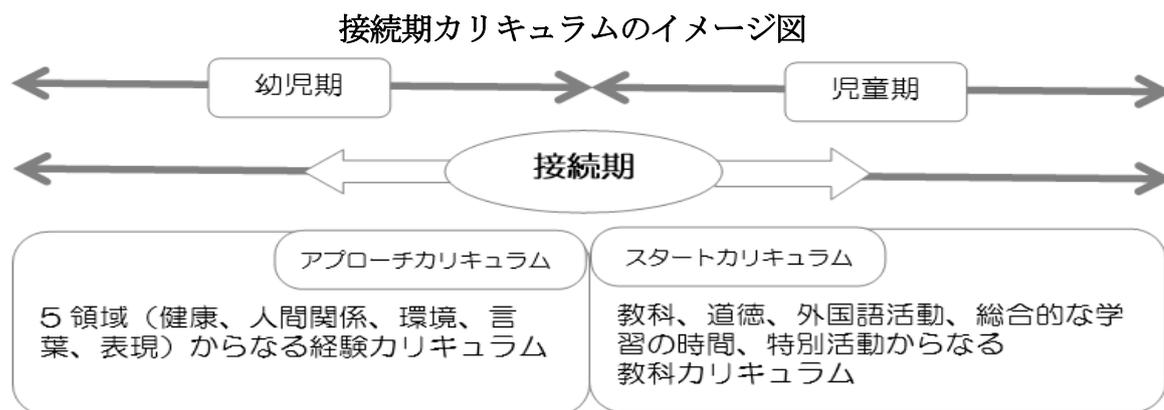
幼児教育と小学校教育との円滑な接続を期待し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。これは、5領域のねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して資質・能力が育まれている5歳児修了時の具体的な姿で、保育者が指導を行う際に考慮するものであり、小学校と共有していく姿である。これらは、0歳児～4歳児期、それぞれの時期にふさわしい指導の積み重ねにより、育まれていくことに留意する必要がある。

【図2】



(3) 接続期カリキュラムとは

【図 3】



幼児期と児童期の教育をつなぎ、スムーズな移行に努める期間が接続期である。接続期就学前の教育課程を「アプローチカリキュラム」、就学後の教育課程を「スタートカリキュラム」と呼び、そして、その双方を合わせたものが「接続期カリキュラム」である。

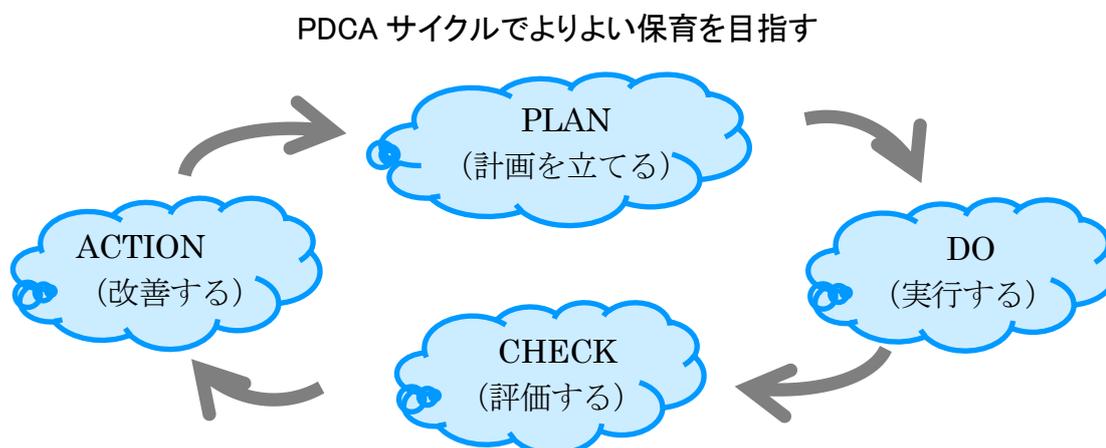
「アプローチカリキュラム」では、「10 の姿」を念頭に、幼児が円滑に小学校の生活や学習へ適応できるようにすることと、幼児期の学びが小学校生活や学習で生かされてつながるように工夫することが求められている。

「スタートカリキュラム」では、児童や学校、地域の実情を踏まえて、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の編成、環境構成の工夫などを行いながら、「10 の姿」を発揮できるようにして、さらにそれを伸ばしつつ、小学校の授業を中心とした学習へとうまくつなげていくことが求められている。

(4) カリキュラム・マネジメントとは

幼児期にふさわしい生活を通して、生きる力の基礎となる資質・能力を育み、次の学校段階の教育課程につなぐためには、カリキュラムを編成し、見直しをもって保育を行うと共に、実践後に幼児の学びや育ちの姿を評価し、保育者の援助の在り方を見直していくことが求められる。こうした一連の PDCA サイクルを計画的・組織的に推進し、園全体でよりよい教育を目指すことが「カリキュラム・マネジメント」である。

【図 4】



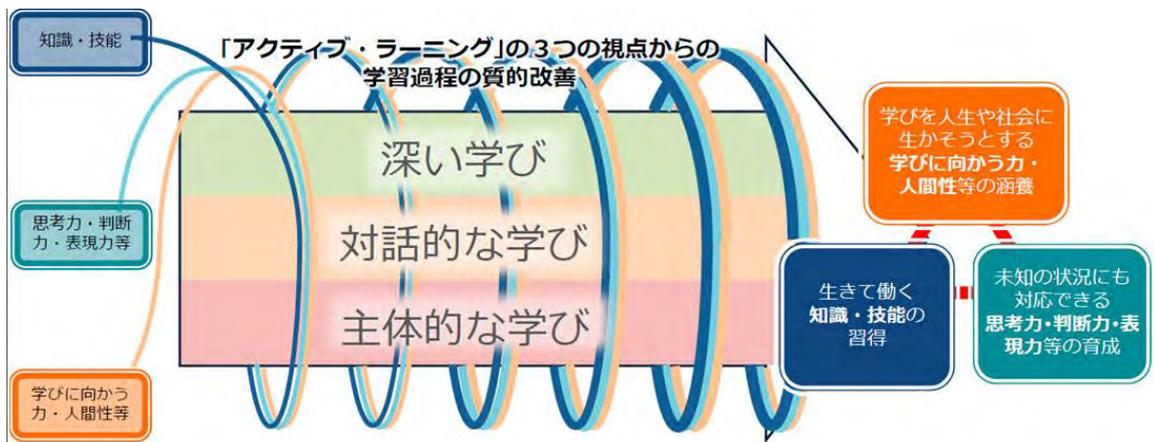
(5) 主体的・対話的で深い学びについて

主体的・対話的で深い学びについては、幼稚園教育要領 1) の第 1 章総則「第 4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」「3 指導計画の作成上の留意事項」において『(2) 幼児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼稚園生活が充実するようにすること』と主体的・対話的で深い学びが実現するために、保育者の指導の改善の必要性を述べている。

本研究の **PDCA** による保小交流推進は、**教職員間での継続的な指導改善を促進し、幼児・児童の交流活動において、「主体的・対話的で深い学び」を実現すると考える。**そして、その「主体的・対話的で深い学び」は、図 5 のように「子どもたちに育みたい資質・能力 (3 つ柱)」と関連し、その育成を支えていく。

主体的な学び	周囲の環境に興味や関心をもって積極的に働きかけ、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待をもちながら、次につなげる
対話的な学び	他者とのかかわりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める
深い学び	直接的・具体的な体験の中で「見方・考え方」を働かせて対象とかかわって心を動かし、子どもなりのやり方で試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える

【図 5】 「資質・能力 (3 つの柱)」と「主体的・対話的で深い学び」の関連



(6) 園児・児童の交流活動について

遊びを通じた指導が中心の幼児期の教育では、夢中になって遊ぶ中での無意識の学びに、将来につながる「学びの芽生え」がある。小学校教育では、児童なりに学習課題を意識し、計画的に学習活動に取り組む「自覚的な学び」が展開される。

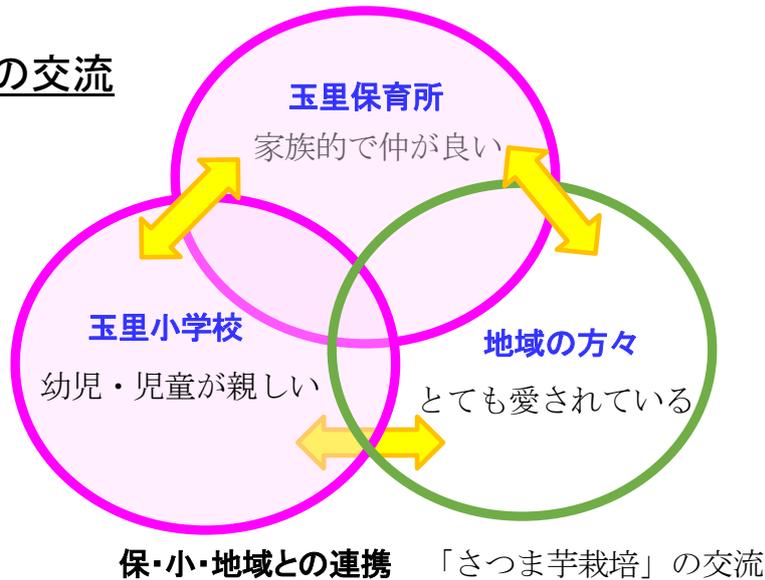
幼保小連携の目的は、遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行である。このことから、接続期カリキュラムの接続面

をより広くする連携の工夫が必要であると考え。

本研究においては、保小職員によるPDCAと複数クラスによる園児・児童の交流（3歳児から3年生まで）という接続面をより広くする連携の推進という工夫から、相互理解を深め、子どもの長期的な発達と学びの連続性を踏まえた玉里保小接続期カリキュラムの編成を追究していきたいと考える。

【図6】

保育所3歳児から
小学校3年生までの交流



幼児が遊びを通して主体的・対話的で深い学びを経て、思考力の芽生えを体験することは、小学校以降の学ぶ新しい生活や新しい環境、教科等の学習に興味・関心をもって主体的につながる点で重要であると考え。

(7) 評価について

保育活動における反省や評価については、幼児の発達の理解と保育者の指導改善という両面から行うことが大切である。保育所保育指針第1章の3において保育計画及び評価が記されている。

また、幼稚園教育要領第1章第4の4においては、評価の妥当性や信頼性が求められている。

- (2) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取り組みを推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること

本研究における組織的かつ計画的な取り組みの推進及び外部専門家（本研究では指導主事）を含む複数による相互評価は、より適切なものとなり、妥当性と信頼性を確保できると考える。

さらに、保小連携の取り組みについて、地域や保護者に発信し、フィードバックすることで、評価の妥当性と信頼性を高めると共に、保小連携の質の向上に努めたいと考える。

2 保小交流

(1) PDCA サイクルを機能させた組織的・計画的な交流活動及び相互理解の推進

【図 7】



<事前打ち合わせ・指導案及び事後評価（P、C、A）>

第1回 交流活動「さつま芋の苗植え」指導案 令和元年5月29日（水）

1 ねらい

- ・ペア活動を中心としたさつま芋の苗植えを通して、幼児と児童の交流を図る。
- ・葉や茎、根の形を観察したり、植え方を学んだりして、さつま芋への興味を深める。
- ・苗がどのように生長し、収穫時にはどのようになるのか想像しながら植え期待を高める。

2 日 時 令和元年度年5月29日（水）午前9時40分～11時

3 場 所 江刺玉里字高間ヶ丘 菅野 至さんの圃場

4 参加対象 保育所園児:4歳児7名:5歳児6名 小学校1年生4名:2年生5名:3年生9名
引率者7名（保育所4,5歳児担任、小学校1,2,3学年担任、他） 計31名

6 移動手段 スクールバス（小学校で手配）

7 日 程

午前 9:00：集合（小学校昇降口）⇒9:40：出発⇒9:50：到着・準備⇒10:00：芋苗植え ⇒10時
30分:手洗い・水分補給⇒10:50：農場出発⇒11:00：解散（小学校昇降口）

～ 中 略 ～

【事後評価と次回交流活動に向けて】

- ・事前打ち合わせは電話のみで、計画案も簡易だったため、交流の具体的場面では、教職員が戸惑うことがあった。係分担も不十分だった。今後は、保小合同での事前打ち合わせをし、詳細な指導案を作成して、幼児・児童の体験が学びにつながるようにする。
- ・ペア活動形態は、触れ合う相手がはっきりしたことで、自然に会話が生まれる等、かかわりが深まりやすく有効だった。次回の活動もペア活動を中心に進める。



第2回 交流活動「さつま芋掘り」指導案 令和元年9月17日（火）

2 ねらい

- ・新たに園児3歳児を加えて交流し、かかわりの輪が広がる楽しさを味わう。
- ・つるや葉の様子、芋の付き方を観察し、芋を傷付けないように丁寧に掘ることを学ぶ。
- ・幼児・児童が互いに力を合わせて芋を掘り出すことで、感動体験を共有する。

3 展開

時間	活動の流れ	援助及び配慮事項	準備・担当
9:50	○東屋に整列 ・至さんに挨拶をする ○所長先生のお話を聞く ○作業手順や役割分担を聞く ○園児と児童で3グループを作る ・同じグループ内で、簡単に自己紹介する。	・農園持ち主の至さんに元気に挨拶できるよう促す ・これから芋ほりを一緒に行い楽しく交流することを伝え、期待が高まるようにする。 ・所長先生のお話を静かに聞くように声を掛ける ・1グループ1畝分の芋を掘ること、早く掘る競争ではないこと、芋の様子を観察しながら丁寧に掘ること等を話し、目的意識がもてるようにする。 ・小学校の先生の話聞いて、3グループに分かれられるように援助する。 ・自分のグループのメンバーが分かるように自己紹介の援助をする。	進行...年長 T 進行...1年生 T) 所長の話 説明...栄養士
10:00	○さつま芋畑へ移動する ・園児・児童がペアで畝へ入る ○園児と児童と一緒にさつま芋掘りを楽しむ ・沢山の芋を掘り出し感動体験を味わう。	・畝に入る際は、児童・園児が必ずペアになるように配慮し、児童に園児のお世話をお願いする。 ・最初につるを引っ張り、さつま芋が見えてきたら丁寧に手で土を掘って掘り出すことを教える。 ・園児がうまく掘れない時は、児童に手伝ってあげるように声を掛ける。 ・スコップで土を掘り、芋を掘り出しやすくする。 ・自分の手で芋を掘り出した感動に共感し、喜びが高まるようにする。	感想発表 小学生 ...1年生 T 園児 ...年長 T

～ 中 略 ～

【事後評価と次回交流活動に向けて】

- ・指導案により保小職員間で流れや指導内容の共通理解が深まり活動をスムーズに進行できた。
- ・焼き芋交流では、一緒に食べることで収穫の喜びを共有できるようにすると共に、保育所の栄養士を活用し、さつま芋について楽しく学べるような内容も取り入れ、さらに興味関心が高まるようにする。

<事例 1 (E)>

「さつま芋の苗植え」 —4,5 歳児と 1,2,3 年生の交流活動—

【幼児の姿】

- ・ 5 歳児は、昨年度に続き 2 回目のさつま芋の苗植え交流である。複式学級で昨年度同じ部屋で過ごした 1 年生や慣れ親しんだ児童らと一緒に交流できることを楽しみにしていた。
- ・ 4 歳児は初めての参加である。園でインゲンやカボチャ、ジャガイモ等の先行経験から、苗植えを楽しみにしていた。児童との交流にも期待を膨らませていた。

【ねらい】

- ・ ペア活動を中心としたさつま芋の苗植えを通して、幼児と児童の交流を図る。
- ・ 葉や茎、根の形を観察したり、植え方を学んだりして、さつま芋への興味を深める。
- ・ 苗がどのように生長し、収穫時にはどのようになるのか想像しながら植え期待を高める。

【前日までの活動】

- ・ 児童と一緒にさつま芋の苗植えをすることや、苗の植え方等を知らせ、期待をもたせる。
- ・ さつま芋の紙芝居でイメージを持たせると共に 150 本植えることを知らせ意欲につなげる。

【当日の朝】 ※波線は「学び」の姿

T 「気付いたこと、驚いたこと、感じたこと、嬉しかったこと...帰ってきたら沢山教えてね。葉っぱはどんな形になっているかよく見てみようね」
 C 「そうだね! (葉っぱは) 細長いんじゃない?」
 C 「根っこに芋ついてるかも! 小さいのがあると思う!」
 C 「葉っぱって枯れてるのかな?」
 T 「いろんなこと発見してよう!」



【芋苗植え交流】



畑の先生から、マルチの穴に手を入れて穴を掘ることや苗は寝かせて植えること、優しく土を掛けること等の説明を受ける。1 人 4 本植えると 150 本になることを知らせ、意欲につなげる。
 *3 グループに分かれ、園児と児童ペアになって畑に入り苗を植える
 児童: 「もう少し土を深く掘るといいよ」と言って「こうするんだよ」と実際に手本を見せながら園児に教える。
 園児: 「こうかな?」と児童に教えられた通りにやろうとする。
 児童: 苗を立ててしまう園児に「直してあげてね」と優しく声を掛けて手伝う。
 *穴の掘方や土の掛け方を工夫しながら協力して 150 本の苗を植える

【幼児の振り返り】

★苗植えについて

C 「苗植え、楽しかった。難しくなかったよ」
 T 「葉っぱは、どんな形だったかな?」
 C 「なんかハートみたいだったよ」
 T 「よく見てたね。根っこに芋はついてた?」
 C 「ついてた!」
 C 「え? ついていなかったよ。茎だけだったよ」
 T 「そうか、紫色の芋はついていなかったんだね。葉っぱは、枯れてたかな?」
 C 「ううん! ちょっとしな~ってしていたけど」

★小学生との交流について

T 「小学生と一緒に活動してどうだったかな?」
 C 「こうだよってね、植え方を教えてもらった」
 C 「優しく教えてくれて嬉しかった」
 C 「手伝ってくれて嬉しかった」



【保育者の振り返り】

幼児の学び	10 の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ 予想したことや疑問に思ったことなどを伝え合う。 ・ さつま芋の苗の植え方を知り、積極的に植える。 ・ 児童と会話したり一緒に植えたりして交流を楽しむ。 ・ 苗の感触や様子、葉の形等に気付き言葉で伝える。 ・ 児童との触れ合いを通して優しさや温かさに触れ、心地よさを感じる。 ・ みんなで協力して 150 本の苗を植えた喜びを味わう。 	思考力に芽生え、言葉による伝え合い 自然との関わり・生命尊重、自立心 言葉による伝え合い、社会生活との関わり 自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現 健康な心と体、豊かな感性と表現、社会生活との関わり 協同性、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

<事例 2 (D)> 「さつま芋掘り」 —3,4,5 歳児と 1,2,3 年生の交流活動—



【ねらい】

- ・新たに園児 3 歳児を加えて交流し、かかわりの輪が広がる楽しさを味わう。
- ・つるや葉の様子、芋の付き方を観察し、芋を傷付けないように丁寧に掘ることを学ぶ。
- ・幼児・児童が互いに力を合わせて芋を掘り出すことで、感動体験を共有する。

【前日までの活動】

事前指導により、子どもたちは、小学生とさつま芋交流をととても楽しみにしていた。「どんな形の芋が掘れるかな?」「巨大なのじゃない?」「小さいのかな?」等予想したことや疑問に思ったことを伝え合う姿が見られた。T は気持ちを受け止め、期待や意欲につなげた。

【さつま芋掘交流】※波線は「学び」の姿



園児・児童でペアになる。最初児童らは、自分のさつま芋を掘ることに夢中だった。T が園児に教えてあげるよう声を掛けると、「手伝ってあげる」と児童から園児に声を掛け、土を掘ったり、芋を引っ張ったりして一緒に作業を進めるようになった。T「優しいお兄さんとお姉さんだね」と優しさを感じられるようにすると、園児の児童への親しみがさらに深まったようだ。大きい芋を掘り当てると、ペアで互いに顔を見合わせて喜び、保育者や教師に「見て!こんな収穫だよ」「6本もくっ付いてたよ」等と感動を伝えてきた。T「すごいね!大きいのが掘れたね」とその感動に共感し達成感や満足感につなげた。もっと掘りたい気持ちから児童だけが先に移動する姿が見られたので、T が園児と一緒に行動するように声を掛けると、児童「おいで、こっちだよ」と園児と手を繋いで移動するようになった。大豊作で掘るのが大変だったが、収穫作業を繰り返すうちに自然に児童が積極的に園児の手助けをする姿が増え、関わりを楽しみながら収穫できた。最後は力を合わせて収穫した芋を運んだ。

【幼児の振り返り】

★さつま芋のこと

- T「どんなさつま芋が掘れたかな?」
 C「こんなに大きい!」「にんじんみたいに細かったよ」「お尻みたいな形もあったよ」等々
 T「いろんな形のお芋が穫れたんだね!」
 1本のつるにどのくらい芋が付いていたかな?」
 C「いっぱい付いていたよね」「5個くらい付いていたよ」「僕のは6個付いてた」
 T「すごいね、よく見ていたね」

★小学生との交流

- *小学生との芋掘交流について「楽しかった」という感想を話す子どもたち。
 T「小学生にしてもらって嬉しかったことはある?」
 C「手伝ってくれて嬉しかった」「こっちだよって教えてくれた」「名前を覚えたよって言ってくれたよ」
 *楽しかった思いを皆で共有し、満足感を味わえるようにする。次回の焼き芋会について知らせ期待につなげる



【保育者の振り返り】

幼児の学び	10の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・ペア児童と同じ目的に向かって取り組み親しみを深める ・さつま芋の掘方を知り、積極的に掘る。 ・相手と一緒に芋を掘り当てた喜びや感動を共有する。 ・児童と会話したり、一緒に芋を掘り当てたり、運んだりして交流を楽しむ。 ・芋の様子や形、数等に気付き言葉で伝える。 ・児童の優しさや温かさに触れ、信頼関係を深める。 ・楽しかった思いを共有し次の活動への期待を膨らませる 	<p>言葉による伝え合い、社会生活との関わり 自然との関わり・生命尊重、自立心 自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現 言葉による伝え合い、豊かな感性と表現 豊かな感性と表現、社会生活との関わり 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、思考力の芽生え 協同性、道徳性・規範意識の芽生え 健康な心と体、自立心、豊かな感性と表現</p>

第3回 交流活動「焼き芋会」指導案 令和元年10月24日（木）

対象：玉里小学校 1年生4名 2年生5名 3年生9名
玉里保育所 3歳児6名 4歳児7名 5歳児7名 計38名

場所：玉里保育所園庭

1 活動名
2 ねらい

「焼き芋交流会」

- ・児童を保育所へ招いて交流し、さらにかかわりを深める。
- ・さつま芋をアルミホイルや濡らした新聞紙でくるむ作業を通して、焼き芋の作り方を学ぶ。
- ・さつま芋を揚げる、煮る、焼く等して、どれが一番甘い体験的に学ぶと共に、さつま芋の栄養について知る。
- ・幼児・児童が収穫したさつま芋と一緒に味わうことで、感動体験を共有する。

3 準備・持ち物

園児・児童：水筒、ハンカチ、ちり紙

園：手洗いソープ、ウェットティッシュ、アルミホイル、新聞紙、テーブル、たらい、火箸、軍手、お盆、ごみ袋、薪ストーブ、栄養教材他

4 展開

時間	活動の流れ（担当 T）	援助及び配慮事項
9:30	*保育所玄関前に集合 (進行:年長 T)	・用便、手洗いを済ませて集合するように声を掛ける。 ・幼児・児童互いに元気に挨拶できるように促す。
9:35	○向かい合って朝の挨拶をする ○所長先生のお話を聞く(所長)	・所長先生のお話を静かに聞くように声を掛ける ・ねらいと活動の流れを話し目的意識と見通しをもたせる。
9:40	○活動の見通し・作業手順 (年長 T)	・ペアをつくれるように援助すると共に自分の相手が分かり、喜んで自己紹介できるように声を掛ける。
9:45	○園児・児童でペアを作る ・ペア同士で自己紹介する。 ・手洗い、消毒をする *テーブルのあるテラスへ移動 ○ペアで作業をする(各担任) ・さつま芋を包む作業を進める ・包んだ芋を薪ストーブに入れる ・手洗い・水分補給 *園庭のシートへ移動する	・手洗いソープ、ウェットティッシュを用意し、衛生面に留意する。 ・児童にうまく芋を包めない園児のお世話をお願いする ・時間内に活動が終了できるように予め1回の芋をストーブに入れておく。その後順次入れられるように援助 ・芋の作業がすべて終わったら、手洗い、水分補給をして、ホールへ移動するように声を掛ける。
10:00	○さつま芋について学ぶ (副所長・栄養士) ・さつま芋の栄養について聞く ・揚げる、煮る、焼く等の芋の味比べ ・どれが甘かったか投票する	・ホールにペアで座るように誘導する。どの子も見えやすい位置に座っているか確認する。 ・さつま芋の栄養素やカロリーについて、チョコ等の食品と視覚的に比較して楽しく学べるようにする。 ・様々な調理法の芋を一口大に切り分け、食べやすいようにする。 ・甘かったと思う調理方法にシールを貼り、結果を可視化する。なぜ甘かったのかを考えられるようにする。
10:20	○焼き芋会食 ・挨拶をして焼き芋を味わう ○感想発表	・みんなで育てた芋のおいしさに共感し、喜びや感動が高まるようにする ・焼き芋交流の感想を聞き、何がどう楽しかったかを全員で共有できるようにする
10:45	(園児:年長 T,児童:1年生 T) ・各学年1名ずつ発表する	・ありがたい言葉を交わし感謝できるようにする。
10:50	○お別れの挨拶をする。 ・次回の活動に期待をもち「さようなら」の挨拶をする。	・次回は小学校で「おもちゃランド」の交流を確認し、期待がもてるようにする。「さようなら」の挨拶をして、楽しかった余韻を残す。

5 安全指導

- ・事前に園児・児童に焼き芋交流を行うことを知らせ、楽しみに待てるようにする。「苗を植えて育て、収穫して食べる」という一連の「さつま芋交流」の最終回であることも話し、さらに期待と意欲が高まるようにする。
- ・交流活動時の約束事について、それぞれの校・所で予め確認し、安全面への配慮を十分にする。

【事後評価と次回交流活動に向けて】

- ・芋の栄養について学んだり、「煮る・焼く・揚げる」の処理をした芋の味比べをしたりした活動は、知識の深化につながった。シールで投票したことで、結果が可視化され理解しやすくなったことも良かった。
- ・振り返りの場では、各学年から1名ずつ発表したことで、発達に応じた感想を聞くことができた。また個々の学びを全体で共有できたことも良かった。
- ・次回の交流活動については、児童の主体性を大切に小学校で担任と相談しながら計画することとする。

<事例3 (D)> 「焼き芋会」 —3,4,5 歳児と 1,2,3 年生の交流活動— *指導主事を招聘

【ねらい】

- ・ さつま芋をアルミホイルや濡らした新聞紙でくるむ作業を通して、焼き芋の作り方を学ぶ。
- ・ 「揚げる、煮る、焼く」の処理をしたさつま芋の味比べをして楽しむと共にその栄養について知る。
- ・ 園児・児童が掘ったさつま芋を一緒に味わうことで、収穫の喜びを共有する。

【焼き芋交流】

挨拶



児童は、積極的に園児にかかわり、相手に応じた優しい言葉で教えていた。園児も児童に親しみを感じ、「こうやるの?」と聞いたり、「上手だね」と手際の良さに憧れたりしていた。芋を仲立ちとしてかかわる中で、「自然との関わり」「言葉による伝え合い」「思考力の芽生え」につながる姿を確認した。

芋を包む作業



言葉による伝え合い

思考力の芽生え

自然との関わり

こうするといよ

どう巻くんだっ
たかな?

「煮る・焼く・揚げる」の処理をした芋の味を比べ、どれが美味しかったかを投票。シールを貼る際に児童が園児に「どれが美味しかった?」と優しく聞いたり、園児が考えて貼るまで待っていたり、どれが多いか一緒に数えたりする姿が見られた。「数量図形への関心」「豊かな感性と表現」「協同性」他につながる姿を確認した。

さつま芋の栄養について

文字等への関心

熱や力になる
食べ物はなん
だろう?

思考力の芽生え

協同性



何が一番多かっ
たですか?

焼くが多かっ
たです!

豊かな感
性と表現

自立心

数量図形
への関心

協同性

焼き芋会食



振り返りの場で、感想発表。「火に近づいた時、顔まで熱くなって怖かったけど楽しかった」他、一人の気づきをみんなで共有することができた。「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」「協同性」につながる姿を確認した。

感想発表

言葉による
伝え合い

今日は、何が楽し
かったですか?

豊かな感
性と表現

焼いたのが楽し
かったです!

協同性



* 年度末には、地域や保護者に、保小交流活動の様子を映像で発信し、フィードバックを行った。

* 2020年には、地元紙に掲載された。

VI まとめ

1 成果

- (1) 保小連携の推進においては、保小職員の対話の深め方が課題であり、それぞれの保育観や指導観、それに基づいた実践の在り方等を、双方でより深く見直していく必要がある。そのことから、PDCA を機能させた本研究は、教員と保育士の対話を増やし、より深く見直していく取り組みとなった。さらに指導主事を含む相互評価及び地域・保護者のフィードバックにより、評価の信頼性と妥当性を確保すると共に、課題を見出しその対応策を考えるという保小連携の在り方についても確認できた。
- (2) 本研究では、市の接続期カリキュラムを基本としながらも、子どもの実態から創りあげるボトムアップによる編成を推進した。複数クラスでの交流活動実践は、年齢幅の広い幼児・児童の実態把握を可能にし、発達と学びの連続性を長期的展望で捉えたカリキュラム編成へつながった。
- (3) 保小連携・交流を推進し、双方のカリキュラムの一貫性や系統性及び「10 の姿」についての理解を深めたことにより、5 領域からなる経験カリキュラムから、教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動からなる教科カリキュラムへと移行する視点を含んだ編成につながった。

2 課題

- (1) ボトムアップによる接続期カリキュラム編成の定着化を図るために、今後も PDCA サイクルでの検証と改善を重ねながら、玉里保小接続期カリキュラム編成のあり方を追究していくこと。
- (2) 本研究での園児 3～5 歳児と児童 1～3 年生との交流活動は、発達と学びの連続性について、長期的な見通しをもつことを可能にした。今後も複数クラスでの交流を継続し、子どもの発達と学びの連続性について追究していくこと。
- (3) 幼小連携は結果在りきではなく、息の長い実践が不可欠であると考えている。定期人事異動により、体制がやむなく途切れてしまうこともあるが、今後も所長、校長、研究主任等がリーダーシップをとり、無理をしない、持続可能な保小連携・交流の在り方について追究していくこと。

【引用文献】

保育所保育指針.2017. 小学校学習指導要領.2017. 幼稚園教育要領.2017.

【参考文献】

幼保連携型認定こども園教育・保育要領 2017.